

井上円了の鹿児島巡講

—新聞記事の調査を通して—

佐藤厚

saton atsushi

1 問題の所在

筆者は現在、井上円了（1858－1919、以下円了と略称）の修身教会設立運動に関する研究を行っている。研究の対象は大きく二つに分かれる。一つは、円了が設立運動のために行った全国巡講について、当時発行された新聞・雑誌をもとに講演の具体的な内容や現地の受け取り方を調査するものである。もう一つは、円了が修身教会設立運動のために刊行した雑誌（『修身教会雑誌』、『修身』）に関する研究である⁽¹⁾。今回の論文は前者に属するものである。

円了の巡講の記録には『南船北馬集』があるが、これは巡講の旅程と接遇を受けた人々の名前、講演の場所、主催者、聴衆の数などを整理した記録であり、実際にどのような講演を行ったのかまでは記されていない⁽²⁾。これに対して当時の新聞・雑誌などは巡講の具体的活動を知り、あるいは当時の円了の評価を知ることが出来る重要な資料である。

筆者はこの新聞記事を調査する方法を通して、前稿では明治39年（1906）と大正7年（1918）に行われた朝鮮巡講⁽³⁾、また明治40年（1907）2月に行われた沖縄巡講についてその内容を明らかにした⁽⁴⁾。引き続き本稿では、明治40年（1907）2月から約1か月行った鹿児島県の巡講を扱う。今回、鹿児島巡講を取り上げたのは深い理由があるわけではなく、順序として沖縄巡講の次に当るからである。調査方法としては、鹿

児島巡講に関する新聞、雑誌の調査、整理に加え、鹿児島県に出張して円了が講演、宿泊した場所を訪ねた。

本稿では、第一に、鹿児島県巡講の旅程を概観し、第二に、当時発行された新聞記事の中の円了の記録を整理し、第三に、講演に関する資料を抽出してその内容を概観し、第四に講演以外の円了の言行を見、第五に円了の巡講に対する現地の人の反応を見ることにする。可能であれば、講演内容を活字化したかったが、紙幅の関係で割愛することにした。

新聞記事の引用にあたっては旧漢字は新漢字に改め、読みやすさを考慮して適宜句読点を附した。■は判読できない文字である。

2 鹿児島巡講の旅程

円了は明治40年2月18日に鹿児島県に上陸し、3月22日までの33日間、巡講を行った。円了の整理によれば、巡回したのは1市、10郡、34カ村で講演場所は51カ所、講演回数は80席、聴衆の合計は2万2千250人であったという(5)。ここではまず『南船北馬集』『鹿児島県紀行』をもとに円了の旅程を整理する。ここでは全体像をつかむのが目的であるから、人名などは省き、移動地と講演場所などだけを記した。なお寺院については大谷派(東)、本願寺派(西)、興正寺派(興)の別を記した。

＜表1＞鹿児島巡講の日程表

	月日(曜)	場所	事項
①	2月18日(月)	鹿児島市 谷山村	午前 沖縄より鹿児島県に入港、上陸 午後講演：谷山村の高等小学校
②	2月19日(火)	鹿児島市 谷山村	午前
③	2月20日(水)	谷山村	午前講演：妙行寺 午後講演：小学校

④	2月21日(木)	谷山村	午前講演：大谷派説教所 午後講演：興正寺派寺院
⑤	2月22日(金)	* 移動	
⑥	2月23日(土)	鹿児島市	午前講演：高等女学校 午後講演：大谷派別院 夕方、京北中学出身者で造士館在学者との懇親
⑦	2月24日(日)	鹿児島市	午前講演：大谷派別院 午後講演：本派別院 午後講演：大谷派別院
⑧	2月25日(月)	鹿児島市	午前講演：師範学校 午後講演：市立女子興業学校 午後講演：高等学校（学友会） 午後 大谷派別院の晩餐会
⑨	2月26日(火)	鹿児島市	午前講演：四恩会 午後講演：小学校 午後講演：興正寺派別院 夜、鶴鳴館において饗応を受ける
⑩	2月27日(水)	* 移動	
⑪	2月28日(木)		午前：阿久根発 午後講演：武本西照寺
⑫	3月1日(金)		午前講演：西徳寺 午後：漁船で阿久根に向かう
⑬	3月2日(土)	阿久根	午前講演：小学校 午後：川内、上東郷村へ
⑭	3月3日(日)	川内	午前講演：某寺（浄久寺） 午後講演：隈城小学校
⑮	3月4日(月)	川内 入来	午前講演：光永寺 午後講演：浄国寺
⑯	3月5日(火)	佐志村	講演：佐志村

⑰	3月6日(水)	*移動 横川村	午前：移動 午後講演：光雲寺
⑱	3月7日(木)	*移動 大口村	午後講演：小学校
⑲	3月8日(金)	*移動 東太良村	講演：覚誓寺
⑳	3月9日(土)	東太良村 国分村	講演：国分村 講演：性応寺
㉑	3月10日(日)	加治木 鹿児島市 桜島村 鹿児島市	午前講演：中学校 午後講演：西桜島村小学校
㉒	3月11日(月)	*移動 吉利村	午前：移動 午後講演：清浄寺
㉓	3月12日(火)	伊作村	講演：大谷派説教所
㉔	3月13日(水)	東加世田 村	講演：阿多村 東加世田村、修身教会発会式
㉕	3月14日(木)	東南方村	午前講演：高等小学校 午後講演：西光寺（西方寺は誤り）
㉖	3月15日(金)	川辺村	講演：大谷派説教所
㉗	3月16日(土)	知覧村 鹿児島市	午前講演：学校（報徳会主催） 午後講演：大谷派説教所
㉘	3月17日(日)	大根占村	午後講演：小根占村小学校
㉙	3月18日(月)	*移動	花岡村を目指して汽船に乗るも、風のため に指宿に漂着
㉚	3月19日(火)	垂水村	講演：小学校
㉛	3月20日(水)	花岡村	午前講演：浄福寺 午後講演：小学校（報恩会の会日、花田中 佐とともに演説）

③②	3月21日(木)	大崎村 志布志村	午前講演：大崎村小学校 午後講演：金剛寺
③③	3月22日(金)	松山村 志布志村	午前講演：小学校 午後講演：金剛寺

この旅程の中、円了の動きは次の5つに整理できる。

第一には2月18日から22日までの5日間。これは鹿児島市および指宿方面での活動である。第二には2月23日から26日までの4日間の鹿児島市内での活動である。この県庁所在地での活動は鹿児島巡講の中心となり新聞にも詳細に取り上げられる。第三には2月27日から3月10日までの12日間であり、主として県北部での活動である。第四には3月11日から16日までの5日間であり、薩南地方での活動である。第五には3月17日から22日までの6日間であり、大隅地方での活動である。そして以後、宮崎県に入り宮崎での巡講となる。

3 鹿児島巡講に関する新聞記事

ここでは当時、鹿児島県で発行された新聞の中、円了の巡講について記す新聞記事を調査した結果を整理する。当時の新聞としては『鹿児島実業新聞』（明治33年創刊）と『鹿児島新聞』（明治15年創刊）の二紙がある。件数は、『鹿児島実業新聞』が40件、『鹿児島新聞』が40件である。それぞれの一覧を示すと次のようになる。なお記事の種別として、短信、広告、講演、コラム、論説、写真、通信の語を用いた。

<表 2> 『鹿児島実業新聞』 中の円了関連記事

	月 日	面/段	見出し	種別
①	1月5日	2/4	井 ^{ママ} の上博士の来県	短信
②	1月8日	2/6	井上博士の近什	短信
③	2月1日	2/4	井上博士の講話日割	短信
④	2月17日	2/3	井上博士着魔	短信
⑤	2月19日	2/4	井上博士着魔	短信
⑥	同	2/4	井上博士談片	短信
⑦	同	2/5	井上博士谷山行	短信
⑧	2月20日	2/5	仏教青年会、井上博士	短信
⑨	2月21日	5/5	井上博士の揮毫	短信
⑩	2月22日	2/4	井上博士の市内講演日割	短信
⑪	同	2/4	西桜島にて講話	短信
⑫	同	5/1	(広告) 仏教青年会発会式	広告
⑬	同	5/3	七高仏教青年会	短信
⑭	2月23日	2/5	井上博士の講演日取変更	短信
⑮	同	5/3	仏教青年会発会式	短信
⑯	同	5/3	会合	短信
⑰	2月24日	2/2	演説 ：井上博士の演説	短信
⑱	同	5/4	鹿屋日報：報徳会、井上円了	短信
⑲	同	5/1	(広告) 報徳会	広告
⑳	同	5/5	仏教青年会の発会式	短信
㉑	2月26日	2/4	市立教育会の博士講演	短信
㉒	同	2/5	井上博士歓迎会 (京北)	短信
㉓	同	2/6	講演 ：宗教の必要	講演
㉔	同	5/1	(広告) 報徳会、井上円了	広告
㉕	同	5/1	講演 ：真怪論 (一)	講演

②⑥	2月27日	2/5	大谷派別院の晩餐会	報告
②⑦	同	2/5	講演：真怪論（二）	講演
②⑧	2月28日	2/4	井上博士招待会	報告
②⑨	同	2/6	講演：真怪論（三）	講演
③⑩	3月1日	2/6	講演：真怪論（四）	講演
③①	同	5/3	講演：鹿児島市報徳会臨時会	講演
③②	3月6日	2/4	伊作仏教青年会	短信
③③	3月13日	3/4	大口便り：井上文学博士の講話	短信
③④	3月16日	2/7	鹿屋日報：井上博士講演会	短信
③⑤	3月24日	1/1	講演：井上博士講演	講演
③⑥	同	1/4	鹿屋日報：往来	短信
③⑦	同	2/6	井上円了講話	短信
③⑧	3月28日	2/5	井上師講話日割	短信
③⑨	3月29日	3/1	垂水時報：名士の往来	短信
④⑩	4月2日	3/3	（行雲流水）甫水の文字解き	コラム

＜表3＞『鹿児島新聞』中の円了関連記事

	月 日	面/段	見出し	種別
①	2月2日	5/1	井上博士の講演予定	短信
②	2月19日	2/4	井上博士来覧	短信
③	同	2/4	井上博士巡回日割	短信
④	2月21日	2/7	七高仏教青年会	短信
⑤	同	3/4	井上円了氏	短信
⑥	2月22日	2/5	井上博士の市内講演	短信
⑦	同	2/5	西桜島の講話	短信
⑧	同	5/1	（広告）仏教青年会発会式	広告
⑨	2月23日	1/1	社会の迷信：井上博士に望む	論説

⑩	同	2 / 4	講演場所変更	短信
⑪	同	5 / 1	(広告) 仏教青年会発会式	広告
⑫	2 月 24 日	2 / 3	(写真) 仏教青年会発会式	写真
⑬	同	3 / 7	はがき集	通信
⑭	同	4 / 1	講演：迷信談	講演
⑮	同	4 / 3	講演	短信
⑯	2 月 26 日	2 / 5	井上博士の講話	短信
⑰	同	2 / 6	婦人会講演会	短信
⑱	同	3 / 7	揮毫	短信
⑲	同	5 / 1	(広告) 報徳会	広告
⑳	2 月 27 日	5 / 1	井上博士の講演	短信
㉑	2 月 28 日	3 / 7	はがき集	通信
㉒	同	5 / 1	井上博士の講演	短信
㉓	同	5 / 4	井上博士招待の宴	短信
㉔	3 月 1 日	5 / 1	鹿児島市報徳会臨時会	短信
㉕	3 月 2 日	3 / 5	井上円了氏	短信
㉖	3 月 3 日	3 / 7	井上博士招待	短信
㉗	同	4 / 2	出水に於ける井上博士講演 宗教と教育の関係	講演
㉘	3 月 5 日	3 / 4	垂水通信、井上博士	短信
㉙	同	4 / 2	井上博士講演	短信
㉚	3 月 6 日	3 / 4	川内教育会に於ける井上円了博士	短信
㉛	3 月 7 日	3 / 3	川内時報	短信
㉜	同	4 / 4	仏教青年会発会式	短信
㉝	3 月 8 日	3 / 3	川内教育会	短信
㉞	3 月 13 日	2 / 2	加治木に於ける井上博士	短信
㉟	同	3 / 1	国分に於ける井上博士の講演	講演

③⑥	3月14日	4/1	井上博士の講演	短信
③⑦	同	4/2	報徳会	短信
③⑧	3月17日	2/6	東加世田村井上博士の講話会	短信
③⑨	3月19日	2/4	井上博士	短信
④⑩	同	5/1	東加世田村井上博士の講話会	短信

二つの新聞の中の円了を扱った件数は、同数である。また、同じ円了の行動を記述するのであるから同じ記事が多くなるのは当然であるが、講演内容を伝える記事では互いに重ならないように配慮したような印象を受ける。

記事の種別の中、一番多いのは円了の動向を伝える短信である。その他には、円了の講演日程についての記事、円了の講演内容、円了の講演を聞いた人の感想などがある。これらを『南船北馬集』と照合することにより、鹿児島巡講の全体的な内容を詳細に復元することができるであろう。しかし、本稿では紙幅の都合もあるため、以下、「4 円了の講演類」、「5 講演以外の円了の言行」、「6 円了の巡講に対する現地の人の反応」、について見て行く。

4 円了の講演類

新聞記事により講演題目あるいは内容が判明したものは次の18件である。

＜表4＞新聞記事の中の円了の講演に関連する記事

* 掲載誌の中、『鹿』は『鹿児島新聞』、『鹿実』は『鹿児島実業新聞』を指す。

	講演題目	月日：場所	掲載紙、月日
①	迷信談	2月23日：高等女学校	『鹿』2.24
②	鹿児島仏教青年会発会式挨拶	2月23日：東本願寺別院	『鹿実』2.24

③	宗教の必要	2月24日：婦人会（大谷派別院）	『鹿実』2.26
④	真怪論	2月24日：第七高校	『鹿実』2.26、27、28、3.1
⑤	修身教育	2月26日：高等小学校	『鹿』2.27、28
⑥	鹿児島市報徳会臨時会での挨拶	2月26日：興正寺（報徳会）	『鹿実』3.1
⑦	宗教と教育の関係、真怪論、女子の心得	2月28日：武本西照寺	『鹿』3.3
⑧	靈魂不滅論	3月3日：浄久寺	『鹿』3.7
⑨	社会教育、心理的妖怪	3月3日：隈之城小学校	『鹿』3.6
⑩	宗教と実業の関係	3月4日：光永寺	『鹿』3.7
⑪	精神修養法、公德養成法	3月7日：大口小学校	『鹿実』3.13
⑫	国分に於ける井上博士の講演、迷信論？	3月9日：国分村	『鹿』3.13、14
⑬	宗教と教育の関係、妖怪迷信論	3月9日：加治木村	『鹿』3.13
⑭	精神修養法、教育	3月10日：中学校	『鹿』3.13
⑮	教育勅語と仏教との関係、実業道德	3月10日：東加世田村	『鹿』3.19
⑯	宗教と教育の関係、迷信論	3月19日：垂水女子小学校	『鹿実』3.29
⑰	宗教上より観たる宇宙及人生	3月20日：女子小学校	『鹿実』3.24
⑱	修身教会関連？	3月21日：大崎	『鹿実』3.24

この中、①から⑥までは鹿児島市内で行われたものであり、⑦から⑱までは鹿児島市以外で行われた講演である。この中、⑫と⑱は題目が記されていないために正確な演題はわからない。よって題目が判明するの

は16件ということになる。これは鹿児島巡講全体で80席行った講演の2割にあたる。

①これは2月23日に高等女学校で行った講演である。題目は「迷信談」。内容は、円了が11、12歳の時に体験した不思議な話、円了の家の下女の話、円了が福井県で体験した不思議な話などを挙げ、これらは神経作用によるものであることを論じている。

②「鹿児島仏教青年会発会式挨拶」は2月23日に鹿児島の大谷派の仏教青年会の発会式で行われたものである。発会式の次第については次のように伝えている。

昨日午後一時当東本願寺別院に於て鹿児島仏教青年会の発会式を挙げたり。式は一着席に就いて雅楽、出仕、一同拝礼、偈陀、論伽、短念仏、和讃、回向文、拝礼、雅楽、礼■賛文、奏楽の順を以て終始し、それより演説会に移れり。是に於て平川浩然師の開会の辞に、沢田、町田、百瀬三氏の演説あり。更に文学博士南条文雄氏の告辞代読、同村上専精師の祝詞代読、仏教青年会総代並七高仏教青年会の祝詞、真宗中学校長稲葉学士、並川辺中学の祝電披露あり。尚松見幹事は本会を代表して謝辞を述べ終りて岩崎造士館長及び別項の如き井上博士の祝詞演説ありて午後四時閉会せり。

円了の演説内容は、信念を持つには宗教を持つのが良く、その中でも仏教が勝れていることを説く。

③これは2月24日に大谷派婦人会で行ったものである。題目は「宗教の必要」。内容は、世に生活するには教育、医術、宗教が必要である。教育には学校、家庭、社会の3つがあるが、現在、学校教育だけ盛んで家庭教育、社会教育は振るわない。これらを盛んにするためには宗教の力が必要であることなどを説く。

④これは2月24日に第七高校で行ったものである。題目は「真怪論」である。内容は、真怪について論じ、欧米の幽霊会などを取り上げ、これらは細工のあるものであり、真怪とはいえないことを述べている。

⑤これは2月26日に高等小学校で行ったものである。題目は「修身教育」。内容は、修身教育は学校教育でしか行われなため、家庭、社会で教育することが大切である。西洋には精神を修養する公園があるが日本には存在しない。そこで作ったのが哲学堂である。

⑥は2月26日に興正寺別院で開かれた鹿児島報徳会の臨時会で行われた挨拶である。報徳会とは、鹿児島出身の軍人、花田仲之介が明治34年（1901）に設立した団体で、教育勅語を基本とした道徳の宣揚を目的とした団体である⁽⁶⁾。これは円了の修身教会と目的が重なっている。円了は『南船北馬集』『鹿児島県紀行』で報徳会について触れており、「同会は陸軍中佐花田仲之助氏の創設せるものにして、その旨趣は修身教会とほとんど同一にして、教育勅語の実践躬行を奨励するにあり。中佐の尽力により、すでにその会は各郡にわたりて開設せられ、もっぱら実行問題を掲げ、毎会会員をして反省遷善せしむる等、他府県におけるこの種の教会の模範とすべきことすくなからず。榎寝栄二氏その幹事たり。」⁽⁷⁾とある。円了は次のような挨拶を行った。まずは修身教会の目的と報徳会との関係である。

余は教育勅語の御主旨を深く日本国民一斑に奉体せしめん為、全国に修身教会を設置せんと希望なるが、既に当地には余の希望主義と全様なる本会の如きあれば別段に修身教会を建つるにも及ばず。世の気運の茲に向ひしを余は大に愉快に感ずるなり。想ふに日本は昔より学問と教へとを混和したるが、西洋は然らずして全く学問と教へとは別なり。故に明治聖代となりて西洋文物輸入の結果、只西洋の学問のみを輸入して教へを入れず、又た我が国古来の教へすら

無視し、道は顔れ忘説出て国民の迷ひし危険なる時代ありき。明治の二十年間位は慥かに暗黒世界なりしと余は思ふ。然るに三十三年の畏しき御勅語は將に暗夜を照せし太陽の如し。國中茲に至りて欣然たりしも尚国民の多くに御勅語の徹底せざるは尚旭日昇天に戸を明けず眠れるに等し。

続いて修身教会の必要について次のように説く。

小学校に於ては御勅語の充分徹底すること難ければ卒業後に於て常にこれを奉読せしめざるべからず、然れども只形式に流るゝは我が良心に対して御勅語に恥つることなきやなど我が身に実行する域に達せざれば不可なり、是れ即ち此会の必要なる所以なりと云ひ、其他会には人心の平和を保つ音楽の必要を説かれたり、又西洋にては一家団欒、朝に祈祷をなす、我が国民は毎朝一家団欒して御勅語の一句「爾臣民父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋友相信じ」まで口誦して彼の祈祷に代ふべし、又我国将来実業の発達には其根本たる実業道德即ち公德心を養ひ、以て其土台を作るべしなど縷々数千言、大に感動を与へたり、

円了は3月20日に鹿屋村の小学校で講演を行っているが、これも報徳会の会日にあたっており、花田とともに演説を行った（後述）。また花田は円了の修身教会の雑誌である『修身』4巻4号（明治40年3月）に「報徳会主意」を掲載している。なお『鹿児島新聞』3月14日付には、出水における円了の講演を契機として同地に報徳会を結成することが協議されたことを伝える（8）。

⑦これは2月28日に武本西照寺で行った講演である。新聞には「宗教と教育の関係」の内容だけが記され、「真怪論」、「女子の心得」は題目

だけが挙げられる。「宗教と教育の関係」では、宗教と教育とは一致すべきものであり、人間の教育は学校教育よりも社会教育が重要である。そのために修身教会を設立することにしたという。

⑧「靈魂不滅論」は3月3日に浄久寺で開かれた上東郷村の仏教青年会発会式での講演である。新聞によれば同仏教青年会は昨年（明治39年）10月に結成されたが、いまだ発会式を挙げていなかった。そこで円了の来訪を機に発会式を挙げることにしたということである。式は9時30、40分ほどから始まり、君が代の唱歌の後、浄久寺の藤井蔵雄師が登壇して式辞と円了を紹介した後、再び藤井が登壇して発会式を祝し、学問と宗教との違いについて述べた。続いて円了が登壇し、仏教青年会の発会式を祝し「諸君が世と共に次第に我が仏教の真味を解し信仰に近づき来るは我々の甚だ悦ぶ所なり」と挨拶し、続いて演題である「靈魂不滅論」を演説した。これについて記者は「縦横の論、自在の弁、以て博士の博士たるを知らしめたり」と述べるが、同時に「思ふに此論題たる高遠幽大、現代に於ける難問題中の難問題たる丈、或は当日の聴衆中、博士の此論旨を適当に咀嚼嚥下したるもの果たして幾許人かある」ともコメントしている。

⑨これは3月3日に隈之城小学校で行われたものである。題目は「社会教育」と「心理的妖怪」である。記者が内容を要約した記事が載っている。「社会教育」は学校教育の充実に反しておろそかになっている。さらに家庭教育も問題でそれが学校教育を破壊している。また日本人が公德に欠ける実例を挙げて欧米各国の公德を称し、公德は同情の発動に依るものであることを述べる。「心理的妖怪」は、天草灘の不知火のようなものは物理的妖怪であることを述べ、心理的妖怪とは、自分自らの心の中から起こる妖怪であることを説く。これに関連して、今から10年ほど前に東京神田の洋服屋の人が狐付きになった話は記者の興味をひいたらしく、これについては詳しく記している。

⑩これは3月4日に光栄寺で行われた講演である。新聞には「宗教と実業の関係」の題目だけしか出ないため講演内容は不明である。当日の様様について、「先づ初めに随行員某「修身教会」設立の趣意を演述し、次で井上博士は「宗教と実業の関係」に就いて長時間の講話を為し聴衆に多大の感動を与へたり」とある。また「当日は雨天の為、聴衆多からざりしも郡役所員、学校職員、町内実業家、一般有志者並びに夫人会員等、重なる人々^{おも}のみにて場内静肅、正午少し前散会せり」と伝える。

⑪これは3月7日に大口小学校で行われたものである。新聞には「精神修養法」、「公德養成法」の題目だけが記され内容はわからないが、「何れも卑近に例を引きて平明に講演し、会衆実に八百名を越へたり」とある。

⑫これは3月9日に始良郡国分村にて行われた講演である。新聞には「国分に於ける井上博士の講演」という見出ししかなくが題目は提示されないが、内容から「迷信論」と思われる。まず「国分」という地名について、円了が昔、神奈川の国府を聞き違えた体験を述べて序論とする。本題に入り、世界の迷信の例として、西洋の迷信、東洋の中国、日本の迷信を挙げる。続いて日本の迷信の中、丙午を忌む迷信を取り上げ、昨年(明治39年)は丙午の年であったから様々な新聞社からこれについて書いてくれと頼まれたことを述べる。そして丙午の迷信の根拠なきことを述べる。最後に野狐、幽霊、生霊、死霊に取りつかれることはみな精神作用のために起こるものであり、変態心理により知られるものであるという。

⑬これは3月9日に加治木村の性応寺で行った講演である。新聞には「宗教と教育の関係」、「妖怪迷信論」と題目だけが掲げられ内容はわからないが、新聞には「聴衆に頗る感動を与へたり」とある。

⑭これは3月10日に加治木村の中学校で行った講演である。題目は「精神修養法」、「教育」である。まず「精神修養法」は、西洋と日本の中

学校の校風、学生の気風などの違いを対照し、円了が先年、イギリスのある中学校で自ら学生となり寄宿生となって観察したことがらを述べた。「教育」は、家庭教育、学校教育、社会教育、自然教育、宗教教育の五つを挙げ、自然教育の内容、およびその欠陥を補うものとして美術教育があることを述べる。「宗教論」は、教育と宗教との関係を説き、教育は心象界に限られ宗教は心体に属し、その関係は鳥の翼のようなものであり次いで心体修練の必要を説いたという。

⑮これは3月10日に東加世田村で行った講演である。題目は「教育勅語と仏教との関係」、「実業道德」である。ここで注目すべきは修身教会の発会式が行われたことである。『南船北馬集』『鹿児島県紀行』には「修身教会の発会式なり。聴衆、堂にあふる。勝田村長、大いに尽力あり。」と簡単な記述にとどまるが、新聞には会の模様が詳しく出ている。

『鹿児島新聞』には、まず勝田村長が博士を紹介して開会の主旨を述べ、次で秦随行員が博士巡歴の目的と修身教会設立の目的を敷衍し、次いで円了が登壇して前述の演題について講じたという。「教育勅語と仏教との関係」は、両者はその根底を一にしている。小学教育と宗教は両々相俟って聖旨の普及を図り国民的精神の自覚を与えるべき密接な関係を持っているにも関わらず、現実には教員と僧侶の間には城壁を築き不一致不調和の状態にある。それにより小学教育の進歩とともに社会民衆の精神状態は頹廃する傾向にある。よってその挽回策として修身教会の設立が急がれる、と述べる。「実業道德」は、忍耐、勉強、儉約、信用、道德、知識の六つの徳目が内容となる。戦後経営においてその向上進歩は一大喫緊事であると述べる。最後に円了は当地での修身教会設立について「聞く所に依れば本村は既に時代の趨勢を看取し修身教会設立の挙あり。之れ実に余が絶大無限の喜悦を以て賛同する所なり」と述べ、喜びを表している。

⑯これは3月19日に垂水女子小学校で行ったものである。新聞には

「宗教と教育の関係」、「迷信論」との題目だけが記されるだけで内容はわからない。

⑰これは3月20日女子小学校において行われた講演である。これは報徳会と共催であった。新聞には「精神修養法」と「宗教上より観たる宇宙及人生」の題目を挙げ、前者は格別記する要なし、として後者についてだけ記している。その内容は、仏教の小乗教と大乘教の対比である。そして大乘では出世間だけではなく世間をも説くべきであるとし、ここに教育と宗教とが密接の関係を有するものであるという。

⑱これは3月21日に大崎村において行われた講話である。新聞に講演題目が掲載されていないのでわからない。内容から修身教会関連と考えられるとした。すなわち修身教会の必要性を説くほか、実業道德についても触れている。

以上判明した講演題目あるいは内容と聴衆との関係については、学校を会場にする場合には迷信論、修身教育などが多く、寺院を会場にする時には宗教、仏教関係の講演が多いことがわかる。

5 講演以外の円了の言行

講演以外の円了の言行として次に掲げるような記事がある。

5-1 出発前の鹿児島新聞への書簡

これは『鹿実』1月8日付に「井上博士の近什」という記事名で収録されたもので、円了が鹿児島新聞社に詩を送ったという内容である。巡講前から現地の新聞社に書簡を送っていることから円了の几帳面な性格が窺える。記事は次の通り。

東京出発に先たち詩にもならず句にもならざる自己流の駄作を試みたり。との前書を附し左の一絶を本社に寄せられたり。

入鹿児島作

世路迷雲何日収、人情依旧飄如秋、欲探■月光風地、霜氣巖時入薩州。

5-2 鹿児島上陸当日の言行

2月18日、鹿児島に上陸した円了に新聞記者が取材を行い、そこで円了は巡講を終えたばかりの沖縄についての感想と鹿児島巡講の抱負を語っている。『鹿児島実業新聞』2月19日付には「井上博士談片」として次のように記す。

左様、東京を出ましたのが去年の二七日で御座いました。夫れから海陸何れも直行と云ふ様な有様で先づ第一に沖縄へ参つたので御座います。沖縄に対する所感ですか。あの土地は一種の沖縄宗とでも評ませうか、兎に角特別の境遇に支配せられてたるので、殊にあの土地に参つて見ましたら、一々通訳を要すので寔に困りました。今回の航海は、風雨が荒くつて随分困りましたが、幸いにして直路安全で御当地の新風物に接したのは、何より嬉しい次第です。御案内の如く、今回の用向は精神協会（筆者注：修身教会）の趣旨を拡張したいと云ふので御座いますますが、本県下での巡回日数三十日を終へましたら、進んで宮崎県に足を入れる積りであります。全県に対しては最初は三十日間の予定でありましたが更に十日間を請求して来ましたので、都合四十日間を御隣県は費す次第です。左様、御当県へは、今回始めて、御座います^{ママ}が、向后到る所、諸多の感慨を惹起するだらうと思ひます。

『鹿児島新聞』2月19日付には「井上博士来覽」として次のように記す。

予は沖縄へは始めて遊びたるが同地は意外に気候も温暖にて昨今
単衣一枚を着すれば足る。同地へは十五日間ばかり滞在し、那覇、
首里を初め嶋尻、国頭等各郡を旅行したり。旅行中最も困難なりし
は宿屋にて、旅館らしき旅館一軒もなく、為に夜具類より食料品に
至るまで携帯したり。同地は往昔は支那に属しめたるに係はらず宗
教は儒教などは更になく、又内地の如く仏教などを信ずるものもな
く、中には神道を信奉するものもあるも、同地は殆ど全体を通じて所
謂「祖先教」なるものが各階級に信奉されつゝあり、左れど其祖先
教なるものも最も狭き意味のものにて全く一家の祖先も崇拜すると
云ふに過ぎざるなり。鹿児島県へも始めて来りしなるが、予が今回
の主なる用件は、教育、宗教、人情、風俗等に就き、視察調査を為
すに在り。県下各地へ約三十日間ばかり滞在し、出来得る限り各郡
を巡遊する考へなり云々と。

5-3 大谷派別院の晩餐会

2月25日、大谷派別院で円了を歓迎する晩餐会が開かれた。新聞は
その時の模様を報道し、中でも円了が妖怪論を繰り広げている様子が生
き生きと伝わってくる。（『鹿実』2月27日付）

当市新町大谷派別院管事松見善月師は過日来滞錫中なる文学博士井
上円了氏を主賓とし、一昨日午後六時全別院教務所大広間に於て晩
餐会を催せり。先つ松見管事の鄭重なる挨拶あり。斯くて一同宴に
移りたるが、当日は有名なる妖怪博士を主賓としたることとて、談
は直ちに妖怪論に入り湧くが如きの興趣を以て充され、殊に博士が
欧米漫遊中の妖怪談は大に列席者の仰聴する所となり、博士亦自ら
立つて変幻の術を擬しつ学理と趣味とを両々拉し来る所、多大の感
興を与えぬ。当日の来賓は岩崎第七高造士館長、百瀬裁判所長、沢

田事務官、山田七高教授、町田実一、鮫島■■■、永田哲二、阿蘇谷侃諸氏其他三十余名なりき。

5-4 井上博士招待の宴

2月26日、円了は鹿児島を代表する料亭である鶴鳴館(9)にて、地元名士たちによる歓迎を受けた。その時、円了は西洋における迷信談、ロンドンの貧民窟、アイルランドの国状など、海外視察にもとづく知見を披露し、また稲生物怪録、木原松桂一代記、神童憑談という日本三大怪談を物語ったと伝えている。(『鹿』2月28日付)

一昨夜鶴鳴館本店に張れたる井上博士の招待宴に会したるは百瀬武策、篠崎五郎、岩崎行親、花田仲之介の諸氏及び両社員外十数名にて卓を囲みて席に着くや、町田実一氏簡単に招待の辞を述べ、博士之に挨拶して直ちに宴に移るや、博士は或はホークを手にしつ或はコップを啣^{くは}みつ西洋の於ける迷信談より東倫敦に於ける貧民窟の状態、愛耳蘭の国状、伊太利の地形、米国の概況より転じて印度遊歴談、川口慧海氏の西藏探検の実況等、諄々として談じ、興味は一談は一談より多く主客共に談笑に時を移し、やがて食事の終ると共に別席に移り、茶菓の間に博士は更に立て招待の謝辞に代へんとて稲生物怪録、木原松桂一代記、神童憑談の日本三大怪談をいと最も面白く簡単に物語られ、猶も種々の質問に答へなどして、退場せしは全夜九時過ぎなりしが近来珍しき清興なりし。

5-5 揮毫に関する記事

他所に於ける巡講と同様、円了は哲学堂設立資金のための揮毫を行っている。それに関する記事は次の通りである。

・井上博士の揮毫

在甕中の同博士は汎ろく揮毫の需めに応じ揮毫料の全部を挙げて修身教会又は哲学堂の維持金たらしむるといふ。右受付事務所は新町東本願寺別院内教務所に設けあり。（『鹿実』）

・はがき集

井上博士は本誌既記の如く、今回県下巡遊中は揮毫の依頼に応せらるゝさうだが、揮毫料は額面（小画仙四切）又は小切にて五十銭、半折掛物又は額面（同二切）一円、全紙及び連絡は一円五十銭乃至二円にて、別に数等ありと（係り）（『鹿』 2月26日付）

・井上博士に揮毫を求めたる者頗る多く約八十幅に達したり。（『鹿実』 3月24日付）

6 円了に関する現地の言説

ここでは新聞記事から窺える鹿児島の人々の円了に対する見方をいくつか紹介する。

6-1 『鹿児島新聞』の巻頭言

第一には、『鹿児島新聞』が2月23日付の巻頭言で掲げた「社会の迷信－井上博士に望む」という記事である。これは次の文から始まる。

東都文壇の一明星、帝国文芸界の一老将たる文学博士井上円了氏来甕す。而して博士は、本日の高等女学校を幕開きに仏教青年会、仏教婦人会、中学校、師範学校、造士館、教育会、報徳会等に於て連日に亘り幾多の講演を試みん予定なりと。博士は独り当市にのみならず、之より県下各郡地方にも青鞋を進めて其所感所信を述ぶる処

あらん筈。余等は、博士が足跡殆んど海内に遍く、学术研究資料の搜索に勉むるの余暇を以て地方民心の啓発に熱中せらるゝ其忠実其好意に多大の同情を表し、感ずるや切ならずばあらず。惟ふに博士の該博なる學術と精透なる見識と鍊磨せる実験とを以て随時随处に適應の演説を為さんとす。其聴者に与ふる印象の深くして且つ大なるものあらんや想像に余りありとす。此時に方り余等一言を費して本県通俗社会、否な下流社会の狀態に就き、何等かの紹介を博士に呈し、博士の或る場合、或る機会に於ける演説の参考に資するも、強ち不急の沙汰ならざるべきか。

次いで鹿児島の下流社会に迷信が蔓延していることを述べ、円了が迷信を打破してくれることを望む。そして「余等は、実に本県下流社会の活状態よりして博士が、迷を啓き、愚を戒むるに相当の腕を揮はるべく懇望するや切なり。」と述べる。

ここから鹿児島の指導層にある人が円了に望むものは迷信の撲滅を通じた社会の改善であることがわかる。

6-2 円了の講演に対する感想

続いて数は少ないが、円了の講演を聞いた人の感想である。次に紹介するのは、高等女学校で行われた講演「迷信論」を聞いた女性の感想である。

妾は昨日高等女学校で井上博士の迷信論を拝聞致しましたが、却々^{なかなか}面白くて利益になりました。我鹿児島にも未だ迷信家が多いやうですから一般の愚夫愚婦にも聞かして欲しいわ（某女）（『鹿』2月24日付）

これは新聞の「はがき集」という投書を集めたコーナーに載せられた。同じ日付の「はがき集」にはペンネーム「好奇翁」から次の提案が新聞社になされ、それに対して新聞社の係の人が答えている。

井上博士の来寛中に鹿児島に於ける妖怪伝説を貴誌に掲げて博士の解説を請ふては如何です（好奇翁）夫は面白いでせう。些と投書されては如何ですか（係り）（『鹿』 2 月 24 日付）

ここから円了の講演が現地の人の興味を引いた様子が確認できる。

最後に、これは感想ではないが、2 月 26 日に行われた鶴鳴館での円了の歓迎会に参加した人で、傘を間違えて持って行った人に関する記事が出ている。

一昨夜、鶴鳴館本館に於ける井上博士歓迎会出席者の御方にて洋傘を御取違への御方あらば其の代傘は生が持つて居ますから（社内■口）（『鹿』 2 月 24 日）

6-3 円了の号「甫水」をめぐる現地の人の議論

これは『鹿児島実業新聞』4 月 2 日号に出るものであり、内容が面白いので紹介する。円了は揮毫を行った際に「甫水」という号を記すが、それが何に基づくものかが現地の人の間で話題になった。典拠を探すも例えば四書五經に基づくものでもない。そうした時、ある人が次の説を出した。円了は哲学者である。哲学の始まりはタレスであり、彼は、万物は水を万有の初めと説いた。「甫水」の「甫」は年甫の甫で「はじめ」と訓ずる。「水」は水で、すなわち万物は水を始めとするという意味であるという解釈であった。後日、この話に参加した人が円了に会い、この話をしたところ、博士は「ウフウフと唯もう笑ひ興して居る」。そのわけ

を尋ねてみると、「ハハハア、付けた当人よりも解釈の方が余程巧い、自分は何もそんな六かしい考へがあつたのぢやない、私の生れは越後の浦村といふ田舎だから、その村名の浦といふ字を二つに分けたまでであつた」と述べたという。これも円了の人柄を推測できるエピソードである。

7 結語

以上、本稿では円了が明治40年2月18日から3月22日までの33日間にを行った鹿児島巡講について、当時の新聞記事をもとに『南船北馬集』『鹿児島県紀行』には記されていないことがらを明らかにした。内容を簡単に整理すると次のようになる。

第一に、当時の鹿児島県で刊行されていた新聞、『鹿児島新聞』、『鹿児島実業新聞』を調査し、円了に関する記事をそれぞれ40件ずつ、都合80件収集した。

第二に、新聞記事をもとに講演内容について整理した。一つ目に、題目あるいは講演内容がわかるものが18件あった。これは鹿児島巡講で行われた講演数(80席)の2割にあたる。二つ目に、講演内容と聴衆との関係については、学校を会場にする場合には迷信論、修身教育などが多く、寺院を会場にする時には宗教、仏教関係の講演が多いことがわかった。講演内容については今後、他の地方における講演内容と比較することにより、修身教会設立運動の実際が明らかになるものと期待される。三つ目に、加世田村には修身教会が誕生しており、そこでの様子が新聞記事を通して知ることができたのは貴重である。四つ目に、講演に関連して円了と鹿児島の仏教界との関連を整理すると、東本願寺の仏教青年会の発会式に参加したほか、伊作仏教青年会の発会式にも出席するなど、仏教青年会という動きが起る中で円了がその一助を果たしたことが窺える。五つ目に、鹿児島で誕生した修養団体である報徳会の花田仲之介と

ともに活動したことも注目される。これは今後も調査を続ける価値のあるテーマであると考える。

第三に、その他の円了の言行では、新聞記者に沖縄での思い出話を語る円了、歓迎会の席で興に乗って妖怪話を語る円了など、その時の円了の様子が目に浮かぶような記事が見られた。

第四に、現地の人々の円了に関する言説では、鹿児島の人々が円了に期待したのは、『鹿児島新聞』の巻頭言にあったように、迷信の撲滅があると思われる。

今後も当時の新聞、雑誌記事などを通して円了の巡講の跡を追い、その講演を再現するとともに、円了の人柄を知ることのできる資料、あるいは現地の人の受け止めを知ることができる資料を発掘していきたい。

<謝辞> 末筆ながら、今回の執筆にあたりお世話になった方々にお礼を申し上げます。井上円了研究センターには、鹿児島出張に関する資金援助をいただきました。また鹿児島における調査の際、大谷幼稚園園長の佐々木智憲先生、真宗大谷派鹿児島別院の藤島顕先生には貴重なお話を伺いました。記してお礼を申し上げます。

<参考文献>

1. 一次資料

井上円了「鹿児島県紀行」(『南船北馬集』第1編、『井上円了選集』12巻、東洋大学創立百周年記念論文集編纂委員会編、1991年)

加藤雄吉、坂田長愛『鹿児島県案内』(1907年、篠原書肆)

報徳会総務所『報徳会沿革誌』(1926年、報徳会総務所)

『鹿児島新聞』

『鹿児島実業新聞』

2. 二次資料

2-1 著作

開教百年史編纂委員会編『本願寺鹿児島開教百年史』（浄土真宗本願寺派鹿児島教区教務所鹿児島別院、1987年）

かくれ念仏小冊子編集委員会『新編真実に生きた人々 薩摩のかくれ念仏』（2006年、真宗大谷派鹿児島別院）

真宗大谷派鹿児島教区開教百年史編纂委員会編『鹿児島教区開教百年史』（真宗大谷派鹿児島教務所、1980年）

2-2 論文

佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」（『井上円了研究センター年報』23号、2014年9月）

— 「井上円了の沖縄巡講－巡講の内容と筆禍事件」（『井上円了研究センター年報』24号、2016年3月）

山本悠三「大正期の教化団体史－その1」（『東京家政大学研究紀要』43集（1）、2003年）

【註】

- (1) 円了は修身教会設立運動の中で『修身教会雑誌』、『修身』という雑誌を刊行している。これは設立運動の中心に位置する雑誌であるが、従来、内容に関する紹介が1号から10号までを除いてほとんどなされていない。そこで筆者は総目次を作成し、内容の特徴を指摘する論文を準備している。拙稿「井上円了の修身教会関連雑誌の研究（1）－『修身教会雑誌』－」（『東洋学研究』53号、2017年3月刊行予定）
- (2) 円了は巡講の内容を、まず『修身教会雑誌』、『修身』に載せ、それを後にまとめて『南船北馬集』にしている。今回取り扱う『南船北馬集』の鹿児島巡講の記事も、当初は『修身』第4巻の7号と8号に「鹿児島県紀行」として掲載したものがもとなっている。
- (3) 拙稿「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」（『井上円了研究センター年報』23号、2014年9月）
- (4) 拙稿「井上円了の沖縄巡講」（『井上円了研究センター年報』24号、2016年3月）
- (5) 井上円了「鹿児島県紀行」（『南船北馬集』巻1、『井上円了選集』12巻、東洋大学創立百周年記念論文集編纂委員会編、1991年）
- (6) 報徳会総務所『報徳会沿革誌』（1926年）なお報徳会は一徳会と並んで大正時代には全国教化団体の組織化に重要な役割を果たす。山本悠三「大正期の教化団体史－その1」（『東京家政大学研究紀要』43集（1）、2003年）

- (7) 井上円了「鹿児島県紀行」(『南船北馬集』巻1、『井上円了選集』東洋大学創立百周年記念論文集編纂委員会編、1991年)
- (8) 『鹿児島新聞』3月14日付「先般来、当地有志者間に於て報徳会開設の議ありしが、井上博士講演以来、社会的教育の諸忽に附すべからざると国民道徳修養の必要との一層切実なるを感じ、近日中、花田仲之介氏の来出を請い、発会の運びに到るべし、従来の風教革まるものあらん」
- (9) 『鹿児島県案内』には次のようにある。「鶴鳴館は山下町及び大門口の両所にあり山下町のは城山の積翠を負ひ全市を俯瞰す、大門口のは海山の眺望に富み、和洋割烹店中にて好評甚高し」(p. 55) 現在では料亭鶴屋となって場所も移動している。